

安心のまちづくりのために

第14回

高齢者の暮らしを考える

1994年9月21日、スコットランドで開かれた第10回国際アルツハイマー病協会国際会議で、会議の初日であるこの日を「世界アルツハイマーデー」と宣言しました。認知症の原因ともなるアルツハイマー病等に関する知識を高め、患者と家族に援助と希望をもたらそうと、世界中で病気への理解を広げる啓発が行われています。来年は4月に京都で会議が開かれます。

松阪市では「認知症になっても安心のまち」を目指して、認知症の啓発活動をするキャラバン・メイトが、認知症サポーター養成講座やキッズサポーター養成講座で、講師を務めています。第一線で活動する方々に話を聞きました。



オレンジリングとは「認知症の方を支援します」という証で、認知症サポーター養成講座修了者が持つ。



インタビュー

キャラバン・メイトとして
どういった思いで活動していますか。



第一地域包括
支援センター
辻裕子さん

認知症を正しく理解し、認知症の人とその家族を見守り支援しようという気持ちを持ってもらうことを目標としています。そして、脳の病気がもとで物忘れなどの症状が出てくることに、本人が一番、不安を感じていることも伝えていきたいです。



第二地域包括
支援センター
鈴木裕美さん

「認知症になったら嫌だ」と誰もが思いますが、周りの人が寄り添い協力してくれることで落ち着いて生活できることも多くあります。もっと大勢の人に認知症の人の心のうちを知ってもらい、他人事ではないと意識してもらえようになりたいです。



株式会社マツザカ
ダスキンマツザカ
野島正宏さん

高齢者に優しいまちづくりの為に何ができるかを考える企業が増えてきました。新しく社員が入ってくるたびに認知症サポーター養成講座を開くほか、地域と企業をつなぐネットワークをつくり、情報を共有できる仕組みづくりも進めたいと考えています。日々の仕事の中で、高齢者と接することが多く、声かけなど小さなことを積み重ねることが何かの役に立つのではないかと思います。





インタビュー

認知症サポーター養成講座で
何か工夫している点がありますか。



グループホーム
なごやか
林明臣さん

キッズサポーター養成講座では、子どもたちが興味を持ち、理解しやすいように寸劇をまじえています。最近ではサポーターの証であるオレンジリングを知っている子もいて、認知症についての理解が広がっているのを感じます。



グループホーム
ところ
前田文江さん

病気があっても、人としての存在には変わりがないことをきちんと伝えると、子どもたちはしっかりと感じとり優しい言葉を返してくれるのでとても心強く感じています。



居宅介護支援事業所
コープみえ
辻美夕起さん

最近、メディアで認知症の話題が多くなりあげられていることもあり、関心を持っている人が増えているように思います。松阪市では地域で認知症の人が安心して暮らせるよう、講座以外にも「徘徊 SOS ネットワークまつさか」などいろいろな取り組みをしていますので、それらも伝えたいです。講座をうけた人が、自分たちの生活の中で何かできることがあるのではと気づき、少し気にかけてもらえるだけでも地域全体の大きな見守りになっていくと思います。

インタビュー

ともに住みやすい街にしていけるには
正しい理解と多くの人の協力が
必要になってくるのですね。



NPO法人
HEART TO
HEART
濱口敦子さん

私は認知症の家族を介護していますが、家族の気持ちを広く伝えたいと思いついての勉強をしました。認知症は、本人や家族にとって人生の中の大きなできごとで、大きな負担感もあります。しかし、オレンジリングをまちで見かけると、とても安心できます。心の不安を少しでも軽くして、よい介護ができるよう、周りの見守りや家族への支援を広げていきたいと思っています。



第五地域包括
支援センター
山本樹利さん

地域包括支援センターでは、積極的に認知症サポーター養成講座を開いています。高齢化が進み、地域で見守り活動をしている人からは「自分たちが見守られる側が変わってきた」という声も聞かれます。次の世代を担う若い方にも興味を持ってもらい、地域全体で認知症の方とその家族を見守ってもらえるよう働きかけます。そして、予防の重要性についても理解してもらえるようにしっかりと取り組んでいきます。

地域、学校、職場で
認知症のことを考える機会を
持ちましょう。
いつでもどこでも10人程度で
あればメイトを派遣します。
【問】 高齢者支援課
☎53-4099